

一般大学生の自閉症スペクトラム傾向と自己概念、情動への評価との関連

松野 実 / 山崎 晃

本研究の目的は、個人の自閉症スペクトラム傾向の高低と、ポジティブ・ネガティブな理想自己と現実自己のズレ及び情動への評価との関連を調査し、それらが自閉症スペクトラム傾向の自尊感情にどのような影響を与えているのか検討することであった。自閉症スペクトラム指数、高校生用自己概念尺度、情動への評価尺度、自尊感情尺度を大学生に実施した (N=300 : 男子 62 名, 女子 238 名)。調査の結果、自閉症スペクトラム傾向の高さやポジティブな理想自己と現実自己のズレは、自尊感情の低さに影響を与えている可能性があることが示された。また、自閉症スペクトラム傾向の高い者は、自身の悲しみを否定的に捉え、悲しみの必要性を感じない傾向にあることが示された。理想自己と現実自己のズレを、ポジティブなものは小さく、ネガティブなものは大きくしていく支援方法を検討することが自閉症スペクトラム傾向の高い学生の自尊感情を高めていくうえで意義があると考えられる。

キーワード：自閉症スペクトラム傾向、自己概念、情動への評価、自尊感情、大学生

問題と目的

2013 年 5 月、アメリカ精神医学会より精神疾患の分類と診断の手引きの最新版である DSM-5 が発表された (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳, 2014)。改訂前の DSM-IV-TR からの大きな変更点の一つに「広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorder : 以下 PDD とする)」から「自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder : 以下 ASD とする)」へと改められたことが挙げられる。これまでの「自閉性障害」、「アスペルガー障害」、「特定不能の広汎性発達障害」と細分化されていた下位分類は ASD という一括りの臨床単位へと変更されている。

診断基準では、DSM-IV-TR の診断基準 A の (1) 対人的相互反応の質的障害、(2) コミュニケーションの質的障害を DSM-5 では診断基

準 A 「社会的コミュニケーションと社会的相互作用の持続的な障害」と統合し、大綱化できるようにした (宮川, 2014)。さらに、宮川 (2014) によれば、それらの大綱化のみでは多様な症状を示す ASD を捉えきれないことになるので、それに代わるものとして障害の重篤度を示すレベルを 1 ～ 3 に大別している。

また、自閉症スペクトラムは広義の自閉症の概念であり、自閉症の症状を健常者と自閉性障害者との間に量的なスペクトラム (連続体) を仮定するものである (Wing, 1981)。自閉症スペクトラム仮説は、一般健常者との連続性を仮定するものであることからアナログ研究の可能性を示唆するものである (若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)。さらに杉山 (2014) は、このスペクトラムの考え方について「例えば、光のスペクトラムである虹の色はどこまでが赤でどこまでが黄色といった



境界線を引くことはできずに、赤から紫まで色
が変化して行く。自閉症スペクトラムにおいて
も、重症の者から軽症の者まで境界線を引か
ずに連続していて(中略)この考え方をとれば、
健常者との境界に位置する境界線上の軽症者が
最も人数が多いと言うことは当然である」と述
べている。

自閉症をスペクトラムとして扱う考え方が一
般的になってきた昨今、多くの研究者が比較的
軽度の自閉の特徴を呈する人々に特有の問題
を議論している(例えば、漆畑・加藤, 2003;
井上, 2010; 神尾, 2008)。漆畑・加藤(2003)は、
高機能自閉症やアスペルガー障害などの高機能
広汎性発達障害(High Functioning Pervasive
Developmental Disorder: 以下 HFPDD とす
る)が疑われる中学生の事例を取り上げ、幼児
期、または学童期に障害が発見されず、思春期
以降に不適応を起こして受診に至るケースを紹
介している。井上(2010)も、早期の適切な治
療が先送りされた結果、青年期に他の精神科的
合併症を主訴として、問題が重篤化することを
指摘しており、早期かつ集中的な支援の必要性
を示唆している。さらに神尾(2008)は、幼児
期の症状が軽度であっても、成人期を迎えるこ
ろには症状の顕在化や精神症状の併発を招き、
その結果、適応の悪化や QOL の低下へと向か
う危険性について言及している。そして今後は、
PDD か非 PDD かという二者択一的な診断分
類を越えた、個人の臨床像の的確な把握が重要
であるとしている。

大学等の高等教育機関においても、ASD の
学生や、ASD の診断を受けていないものの、
自閉症スペクトラム傾向(以下 ASD 傾向とす
る)の強い学生がいることが推察される。支援
障害学生数における発達障害の比率は年々増加
傾向にあること、発達障害の診断書をもつ支援
障害学生の 7 割が HFPDD 等であること、診

断書はないものの発達障害があることが推定
され教育上の配慮を行っている者においても、
HFPDD 等は過半数を占めていることを示し
た報告もあり、ASD は発達障害学生の中核的
障害であるといえる(石井・篠田, 2014; 佐藤・
徳永, 2006)。

中学生から大学生までの青年期の発達課題
を、エリクソン(E. H. Erikson)はアイデン
ティティの確立であるとしている。滝吉・田中
(2009)は、個人のアイデンティティは他者と
の相互交渉的なやりとりなしには形成されず、
HFPDD 者が他者との相互調整や相互交渉に
困難があることを考えると、「自分は何者か」
という問いに対する答えを見つけることは彼ら
にとって容易でなく、自己を確立するのが難し
いと論じている。つまり、ASD 者に対する支
援において、ASD 者の自己概念の特異性に着
目する必要性が考えられる。

ところで、自己概念の領域では、現実自己と
理想自己のズレを用いた研究がなされている。
遠藤(1992a)は、ポジティブ・ネガティブな
項目において理想自己と現実自己のズレと自尊
感情との関係を調査し、ポジティブな項目では
ズレが大きいほど、ネガティブな項目ではズレ
が小さいほど自尊感情が低くなることを示し
た。また、遠藤(1992b)や山本・田上(2003)
は、ズレの大きさと自尊感情との関係が、個人
にとって重要なものと判断される理想自己にお
いてより顕著に表れることを論証した。さらに、
水間(2004)は理想自己への志向性が、理想自
己実現に対する意味と理想自己の実現可能性に
よって促進されることを示唆した。

また、松岡(2006)は、理想自己と現実自己
のズレは加齢に伴って減少し、そのことが自尊
感情の維持と関わっていることを明らかにし
た。

以上のように、これまで理想自己についての



研究は、「かくありたくない自己」であるネガティブな理想自己を視野に入れること、理想自己の項目に重みづけを行い個人にとって重要と判断されるものが自尊感情により強く影響していること、年齢が上がっていくにつれ理想自己と現実自己のズレが小さくなることなど、幅広く研究されている(遠藤, 1992a, 1992b; 山本・田上, 2003; 水間, 2004; 松岡, 2006)。しかしながら、ASD 者や ASD 傾向の強い者と理想自己と現実自己のズレとの関係を論じたものは少ない。

滝吉・田中(2011a)は、ASD 者の自己について、想起の自己と概念的自己とのつながりの脆弱性があると述べており、この脆弱性は自己を概念化してとらえようとするとき、その概念化のために適当な出来事や体験を想起し、意味づけることが難しいことを示している。また、ASD 者に特有の自己の発達における特徴的な段階の一つとして、思春期・青年期になると、幼少期から示し続けてきた他者との関係を構築する上での自分自身の特異的な行動や感覚を認識するようになり、そのような自分自身に対する違和感や疑問、不安を抱くようになることが考えられる(滝吉・田中, 2011a)。

ASD 者は自己の形成に困難を示すことが論じられているが、ASD が自閉症の特徴を連続体として捉える概念であることから、自己形成の困難さは ASD 傾向の高い定型発達者においても同様に現れると思われる。

そこで本研究では、個人の ASD 傾向の高低と、ポジティブ・ネガティブな理想自己と現実自己のズレとの関連を調査し、ASD 傾向の高い学生のズレの大きさが自尊感情にどのような影響を与えているか検討することを第一の目的とする。

また、ASD 者に対する支援において、Prizant, Wetherby, Rubin, Laurent, &

Rydell (2006) は情動調整の重要性を強調している。Prizant et al., (2006) は、ASD 児が示す情動調整の困難の一つに、親や他のパートナーが子どものシグナルを読み取ることの難しさを挙げている。この特徴は、アレキシサイミアと重なる点があると思われる。

守口(2011)はアレキシサイミアの特徴として①自分の感情がどのようなものであるか言葉で表したり、情動が喚起されたことによってもたらされる感情と身体感覚とを区別したりすることが困難であること、②感情を他人に言葉で表すのが困難であること、③空想力・想像力が制限されていること、④(自己の内面よりも)、刺激に結びついた外的な事実へ関心が向かう認知スタイルの4つを挙げている。福島・高須(2011)や西田(2015)は、ASD 傾向と上述したアレキシサイミア傾向との間に有意な相関が得られたことを報告しており、ASD とアレキシサイミアの重なりがあると思われる。

奥村(2008, 2010)は、アレキシサイミアと関連の深い概念として「情動への評価」を提唱している。情動への評価とは、自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけを伴う評価と定義され、情動への否定的な評価はアレキシサイミア傾向と正の、肯定的な評価は負の相関を示している(奥村, 2008)。

また、滝吉・田中(2011b)は、PDD 者が定型発達者と比較して、自己の情動について言及する際否定的な発言が多いと論じており、ASD 傾向の高い者は自己の情動について否定的な評価を行うことが予想される。

さらに、奥村(2008)は情動への評価尺度を作成しており、情動への否定的評価は自尊感情と負の、肯定的評価は自尊感情と正の相関を示している。ASD 傾向の高い者が情動への否定的評価が高く、肯定的評価が低いのであれば、それらを通じて自尊感情に影響を与えることが



考えられる。

そこで本研究では、個人の ASD 傾向の高低と情動への評価との関連を調査し、ASD 傾向の高い学生の情動への評価の在り方が自尊感情にどのような影響を与えているのか検討することを第二の目的とする。

以上のことから、本研究では、以下の仮説を検討する。

仮説 1 : ASD 傾向の高い者は、自尊感情が低いであろう。

仮説 2 : ASD 傾向の高さは、ポジティブな理想自己と現実自己のズレと正の、ネガティブな理想自己と現実自己のズレと負の相関を示すであろう。また、ASD 傾向の高い者の自尊感情の低さは、これらのズレの大きさの影響を受けるであろう (Figure 1)。

仮説 3 : ASD 傾向の高さは、情動への否定的評価と正の、肯定的評価と負の相関を示すであろう。また、ASD 傾向の高い者の自尊感情の低さは、これらの情動への評価の影響を受けるであろう (Figure 1)。

方法

調査対象者と調査時期

H 大学の学生 370 名を対象に質問紙調査を行った。欠損値のあるものや回答に偏りのあるものを除き、300 名 (男子 62 名、女子 238 名、平均年齢 18.9 歳、標準偏差 = 1.58、年齢幅 18 ~ 39 歳) を分析対象とした。調査は 2016 年 6 月中旬及び 8 月上旬に行った。

調査内容

ASD 傾向

Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, & Clubley (2001) の作成した自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient : 以下 AQ とする) の日本語版 (若林他, 2004) を使用した。AQ は「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」という 5 つの下位尺度からなり、各下位尺度に 10 項目ずつ含まれ、計 50 問からなる。回答は 4 件法で、採点は各項目で ASD 傾向を示すとされる側への回答で 1 点が与えられ、得点範囲は 0 ~ 50 点となる。

自己概念

山本・田上 (2003) の作成した高校生用自己概念尺度 24 項目 (ポジティブ・ネガティブ領域各 12 項目) を使用する。この尺度は、ポジ

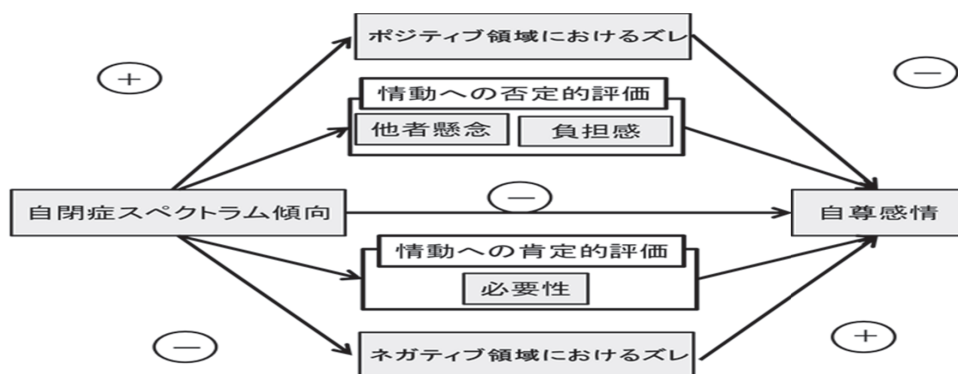


Figure 1 ASD 傾向が理想自己と現実自己のズレ、情動への評価を通して自尊感情に影響を与える過程の仮説モデル



ティブ領域において「活動性」「自信」「思いやり」の3下位尺度、ネガティブ領域において「自己中心性」「消極性」「低意欲」の3下位尺度からなっており、各項目において現実自己、理想自己に関する回答を5件法で行う。

理想自己は1～5点で得点化し、点数が高いほどかありたい、かありたくない程度が強いことを表す。現実自己は1～5点で得点化し、点数が高いほどポジティブ/ネガティブな項目に現実の自分が当てはまっていることを表す。理想自己得点から現実自己得点を引いたものをズレ得点として使用し、ポジティブ・ネガティブの各領域において12項目のズレ得点を合計した。得点範囲は-48～48点であった。

情動への評価

奥村(2008)の作成した情動への評価尺度を使用する。この尺度は、情動についての否定的評価である「他者懸念」「負担感」、肯定的評価である「必要性」の3下位尺度からなるが、本研究では奥村(2008)の研究で信頼性・妥当性の確認された「怒り」・「悲しみ」の2つの情動を取り上げ、6件法で評価する。「怒り」・「悲しみ」それぞれ22項目ずつからなる。

1～6点で得点化し、悲しみ・怒りのそれぞれの下位尺度ごとに平均値を算出した。得点範囲は1～6点である。

自尊感情

桜井(2000)において単因子構造・信頼性・妥当性が確認されたRosenbergのSelf-Esteem Scaleの日本語版(10項目、4件法)を使用する。各項目1～4点で得点化し、合計点を自尊感情得点とした。

倫理的配慮

本研究は、広島文化学園大学教育学研究科・学芸学部研究倫理委員会の承認を得て調査を行った。

具体的には、調査は強制されるものではなく、

質問をとばしたり途中で回答をやめたりすることができることや、調査結果は研究目的にのみ使用され、個人の回答がそのままの形で公表されることはないことなどを事前に教示した。

結果

各尺度の平均値と標準偏差

Table 1に各尺度の男女別の平均値と標準偏差を示す。全体の平均値は、AQで21.16(SD=5.63)、自尊感情で24.32(SD=5.14)、ポジティブ領域におけるズレで18.36(SD=9.47)、ネガティブ領域におけるズレで15.05(SD=10.20)であった。

AQの性差

AQについて、t検定を用いて性差を検討した。その結果、男子のAQが女子よりも有意に高かった($t(298)=2.25, p<.05$)。このことから、男子の方が女子よりASD傾向が高いということがいえる。

尺度間の相関

Figure 1で想定したモデルの影響関係が妥当であるかどうか確認するため、尺度間の相関係数を算出した。その結果をTable 2に示す。AQは、自尊感情、ネガティブ領域におけるズレ得点と負の、ポジティブ領域におけるズレ得点、悲しみの「他者懸念」因子と正の有意な相関がみられた(順に、 $r=-.41, p<.001$; $r=-.26, p<.001$; $r=.12, p<.05$; $r=.12, p<.05$)。

このことから、ASD傾向が高いほど自尊感情が低く、かありたい理想自己と現実自己のズレが大きく、かありたくない理想自己と現実自己のズレが小さく、自己の悲しみに対して他者の目を気にした否定的な評価をするといえる。

また、自尊感情は、AQ、ポジティブ領域におけるズレ得点、悲しみの「他者懸念」因子、悲しみの「負担感」因子、怒りの「他者懸念」因



Table 1 各尺度の平均値と標準偏差

| | AQ | 自尊感情 | ポジティブ領域におけるズレ | ネガティブ領域におけるズレ | 悲しみの他者懸念 | 悲しみの必要性 | 悲しみの負担感 | 怒りの他者懸念 | 怒りの必要性 | 怒りの負担感 |
|-----------|-----|--------|---------------|---------------|----------|---------|---------|---------|--------|--------|
| 男子(n=62) | 平均値 | 22.58 | 25.19 | 14.35 | 15.29 | 2.80 | 4.86 | 3.35 | 3.70 | 3.88 |
| | SD | (4.99) | (5.40) | (10.22) | (11.29) | (1.08) | (0.77) | (1.19) | (1.04) | (1.05) |
| 女子(n=238) | 平均値 | 20.79 | 24.10 | 19.40 | 14.99 | 2.93 | 4.75 | 3.62 | 3.54 | 3.91 |
| | SD | (5.74) | (5.06) | (9.00) | (9.92) | (0.92) | (0.75) | (1.01) | (0.94) | (0.89) |
| 合計(n=300) | 平均値 | 21.16 | 24.32 | 18.36 | 15.05 | 2.90 | 4.77 | 3.57 | 3.57 | 3.91 |
| | SD | (5.63) | (5.14) | (9.47) | (10.20) | (0.96) | (0.76) | (1.06) | (0.96) | (0.93) |

Table 2 AQ及び自尊感情と各尺度間の相関関係(n=300)

| | 自尊感情 | ポジティブ領域におけるズレ | ネガティブ領域におけるズレ | 悲しみの他者懸念 | 悲しみの必要性 | 悲しみの負担感 | 怒りの他者懸念 | 怒りの必要性 | 怒りの負担感 |
|------|------|---------------|---------------|----------|---------|---------|---------|---------|--------|
| AQ | - | -.41 *** | .12 * | -.26 *** | .12 * | -.07 | -.01 | .04 | -.03 |
| 自尊感情 | | - | -.51 *** | .25 *** | -.15 ** | .14 * | -.13 * | -.16 ** | .07 |

***p<.001

**p<.01

*p<.05

Table 3 (性別)×(AQの高低)の2要因分散分析の主な結果(n=283)

| ソース | 自由度 | F値(自尊感情) | F値(ポジティブ領域におけるズレ) | F値(ネガティブ領域におけるズレ) | F値(悲しみの他者懸念) | F値(悲しみの必要性) | F値(悲しみの負担感) |
|----------|-----|--------------|-------------------|-------------------|--------------|--------------|--------------|
| 修正モデル | 3 | 15.14 *** | 4.71 ** | 7.82 *** | 3.37 * | 2.17 † | 1.09 |
| 切片 | 1 | 4,484.62 *** | 600.79 *** | 443.74 *** | 1,542.89 *** | 7,072.35 *** | 1,879.36 *** |
| 性別 | 1 | 5.52 * | 10.73 ** | .47 | 3.25 † | 2.50 | 3.00 † |
| AQの高低 | 1 | 29.21 *** | 1.07 | 13.73 *** | 7.96 ** | 4.05 * | .44 |
| 性別×AQの高低 | 1 | .24 | .29 | .01 | 1.56 | .29 | .04 |
| 誤差 | 279 | | | | | | |
| 総和 | 283 | | | | | | |
| 修正総和 | 282 | | | | | | |

***p<.001

**p<.01

*p<.05

†p<.10

子とそれぞれ負の、ネガティブ領域におけるズレ得点、悲しみの「必要性」因子とそれぞれ正の相関がみられた(順に、 $r=-.41$, $p<.001$; $r=-.51$, $p<.001$; $r=-.15$, $p<.01$; $r=-.13$, $p<.05$; $r=-.16$, $p<.01$; $r=.25$, $p<.001$; $r=.14$, $p<.05$)。

このことから、自尊感情が高いほどASD傾向が低く、かくありたい理想自己と現実

自己のズレが小さく、かくありたくない理想自己と現実自己のズレが大きいことがわかる。また、自尊感情の高い者は、自己の悲しみにおいて肯定的評価を行い、悲しみと怒りの一部において否定的評価を行わない傾向があるといえる。

性別とAQの高低を独立変数とした2要因分散分析

AQの高低と性別との関係によって理想自己と現実自己のズレ及び情動への評価に違い

がみられるのか検討するため、中央値折半法($Me=21$)により、AQが22点以上の者をAQ高群、20点以下の者をAQ低群として、(性別)×(AQの高低)の2要因分散分析を行った。その結果、有意な主効果がみられたものをTable 3に示す。自尊感情において、AQの主効果が有意で($F(1, 279)=29.21$, $p<.001$)、AQ高群の方がAQ低群より自尊感情が低かった。性の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

ポジティブ領域におけるズレでは、性の主効果が有意で($F(1, 279)=10.73$, $p<.01$)、女子の方が男子よりズレが大きかった。AQの主効果及び交互作用は有意ではなかった。

ネガティブ領域におけるズレでは、AQの主効果が有意であり($F(1, 279)=13.73$, $p<.001$)、AQ高群の方がAQ低群よりズレが小さかった。性の主効果及び交互作用は有意ではなかった。



悲しみの「他者懸念」因子では、AQの主効果が有意であり ($F(1, 279)=7.96, p<.01$), AQ高群の方がAQ低群より悲しみの「他者懸念」因子の得点が高かった。また、性の主効果は有意傾向であり ($F(1, 279)=3.25, p<.10$), 女子の方が男子より得点が高い傾向があった。交互作用は有意ではなかった。

悲しみの「必要性」因子では、AQの主効果が有意であり ($F(1, 279)=4.05, p<.05$), AQ高群の方がAQ低群よりも低かった。性の主効果及び交互作用は有意ではなかった。

悲しみの「負担感」因子では、性の主効果に有意傾向がみられ ($F(1, 279)=3.00, p<.10$), 女子の方が男子より高い傾向があった。AQの主効果及び交互作用は有意ではなかった。

以上のことから、AQ高群では、自尊感情が低く、ネガティブ領域におけるズレが小さく、悲しみにおいて他者の目を気にした評価を行い、その必要性を感じにくいということがいえる。

また、女子は男子よりポジティブ領域におけるズレが大きく、悲しみにおいて否定的な評価をしているといえる。

AQと自己概念のパス解析

Table 2 で示したように、自尊感情はポジ

ティブ領域におけるズレと負の相関が、ネガティブ領域におけるズレと正の相関がある。また、AQは自尊感情と負の相関があるとともに、ポジティブ領域におけるズレと正の、ネガティブ領域におけるズレと負の相関にある。また、分散分析の結果から、ASD傾向の高い群はネガティブ領域におけるズレが小さく、自尊感情が低いということが示された。

以上のことから、Figure 1 のモデルを想定し、ポジティブ領域におけるズレ、ネガティブ領域におけるズレ、自尊感情に誤差変数を投入し、パス解析を行った。その結果、Figure 2 のような結果が得られた。自尊感情に対してAQ、ポジティブ領域におけるズレ、ネガティブ領域におけるズレのそれぞれが有意であった。また、AQからポジティブ領域におけるズレ、ネガティブ領域におけるズレへのパスもそれぞれ有意であった。決定係数は、ポジティブ領域におけるズレで $R^2=.01$, ネガティブ領域におけるズレで $R^2=.07$, 自尊感情で $R^2=.42$ の値が得られた。モデルの適合度は $GFI=.997$, $AGFI=.967$, $CFI=.995$, $RMSEA=.057$ であり、それぞれ良好な値を示した。

考察

本研究の目的は、個人のASD傾向が理想自

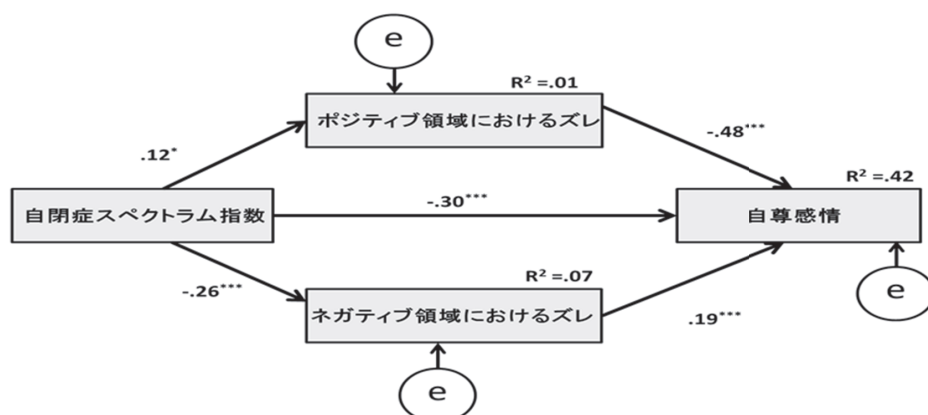


Figure 2 AQが自尊感情に影響を与える過程のパスモデル



己と現実自己のズレや情動への評価に与える影響を調査し、これらの要因が自尊感情にどのような影響を与えているか検討することであった。以下では、本研究の結果から、まず、各尺度の性差について考察を行い、次いで仮説の検討を行う。最後に本研究の結論を述べ、今後の課題を整理することとする。

1. 性差

AQについて、若林他(2004)や國平・千住・若林・長谷川(2002)などと同様に、本研究においても男子の方が女子より有意に高い結果となった。

また、ポジティブ領域におけるズレにおいて、分散分析の結果から、女子の方が男子よりズレが大きいという結果が得られた一方、ネガティブ領域におけるズレにおいて性差は得られなかった。水間(2004)は、女子の方が男子よりも「こうありたい理想の自己」をより自分にとって大事なものとして意識していることを示している。女子の場合、理想自己を大事に思うために現状の自分に満足できないという意識構造が反映されたと考えることができ、本研究においてもポジティブな理想自己と現実自己のズレが大きくなったと考えられる。

2. 仮説の検討

(1) ASD傾向と自尊感情との関係 個人のASD傾向の高さと自尊感情との関係を調べるために、AQと自尊感情との相関関係をみた結果、有意な負の相関を示した(Table 2)。このことから、ASD傾向が高いほど自尊感情が低くなることが説明され、仮説1は支持された。千住・國平・若林・長谷川(2002)は、AQは、抑うつ状態やいじめ被害経験と正の相関を示すことを報告している。桜井(2000)は自尊感情と抑うつとの間に有意な負の相関がみられることを明らかにしており、本研究で得られたAQと自尊感情との負の相関は妥当であるといえ

る。

(2) ASD傾向と自己概念との関係及びそれらが自尊感情に与える影響 仮説2は、ASD傾向の高さがポジティブ/ネガティブな理想自己と現実自己のズレに影響を与え、ASD傾向の高い者の自尊感情の低さは、これらのズレの大きさの影響を受けるというFigure 1モデルの一部を検討することであった。

そこで、AQから自尊感情及び各ズレ得点、各ズレ得点から自尊感情にパスを想定して解析を行ったところ、Figure 2のような結果が得られた。想定したパスはすべて有意であったことから、仮説2は概ね支持されたといえる。

滝吉・田中(2009)は、アイデンティティの確立は他者との相互作用の中で行われるものであり、それは他者との関係の構築に困難のあるASD者において容易なものではないことを述べており、このことが、AQが理想自己と現実自己のズレに影響を与えている関係に反映されたと思われる。

しかしながら、AQによる理想自己と現実自己のズレの説明率は、ポジティブ領域におけるズレで $R^2=.01$ 、ネガティブ領域におけるズレで $R^2=.07$ と大きいものではなく、ASD傾向の高さは理想自己と現実自己のズレに影響を及ぼしているが、それだけでこれらのズレの関係を十分予測できるものではないといえる。そのため、理想自己と現実自己のズレは、ASD傾向以外の要因の影響を受けている可能性が考えられる。

また、AQ、ポジティブ領域におけるズレ、ネガティブ領域におけるズレは自尊感情に対して中等度の説明率を持っており($R^2=.42$)、自尊感情に与えている影響はポジティブ領域におけるズレ、AQ、ネガティブ領域におけるズレの順に大きかった。遠藤(1992a)は、ネガティブな理想自己と現実自己のズレの大きさの方



が、ポジティブな場合よりも自尊感情と強いかわりを示したことを報告しているが、山本・田上 (2003) の自己概念尺度を用いた本研究結果ではポジティブな領域におけるズレの方が自尊感情により強く関わっていた。AQ が自尊感情に直接的に影響しているパスも有意であったが、それ以上に、ポジティブ領域におけるズレから自尊感情へのパスのパス係数が大きかった。

前述のように、ASD 傾向の高さだけで理想自己と現実自己のズレを十分に説明できないのであれば、ズレの大きさは ASD 傾向以外の要因によって変容すると考えられる。ASD は先天的な障害であると考えられている (APA, 2013) ため、個人の ASD 傾向を変容させることは困難であると思われる。しかし、ASD 傾向が理想自己と現実自己のズレを強く説明せず、他の環境要因がズレの大きさを規定するのであれば、これらのズレは変容可能であると考えられる。

実際に、松岡 (2006) は、本研究でいうポジティブな理想自己と現実自己のズレは加齢とともに減少していくという過程を明らかにしている。このことから、理想自己と現実自己のズレは変容可能であると思われる。

自尊感情は、ASD 傾向によってのみならず、理想自己と現実自己のズレによる影響を少なからず受けている。

以上のことから、ASD 傾向に配慮した支援のみならず、理想自己と現実自己のズレを、ポジティブなものは小さく、ネガティブなものは大きくしていく支援は、ASD 傾向の高い学生の自尊感情を高めていくうえで効果があると思われる。

(3) ASD 傾向と情動への評価との関係及びそれらが自尊感情に与える影響 仮説 3 は、ASD 傾向の高さが情動への評価に影響を与え、

ASD 傾向の高い者の自尊感情の低さは、情動への評価の影響を受けるという Figure 1 モデルの一部を検討することであった。

Table 2 に示したように、情動への評価と自尊感情との相関は、部分的に有意なものがあったが、AQ とは悲しみの他者懸念因子の他のすべての変数と有意な相関が得られなかった。情動への評価と自尊感情及び AQ との間に有意な相関が得られたものも、相関係数が小さく、仮説 3 は支持されなかった。

奥村 (2008) では、情動への評価尺度の妥当性を確認する中で、悲しみ、怒りの各 3 因子と自尊感情との間の相関を求めている。その結果、自尊感情と情動への評価尺度の下位因子は、 $r = |.21|$ から $|.37|$ の、弱から中等度の相関係数を示した (奥村, 2008)。本研究結果と比較した場合、一部自尊感情との有意な相関の得られない変数があり、有意な相関が得られたとしてもその相関係数は小さかった。これは、本研究の対象者が偏っている可能性を示している。

また、AQ と情動への評価尺度の相関は、AQ と情動への肯定的評価の間で負の、AQ と情動への否定的評価の間で正の相関を示すことを予想していたが、Table 2 に示した通り、有意な相関を示したのは悲しみの他者懸念因子のみであり、AQ と他の変数との間に有意な相関はなかった。しかしながら分散分析の結果では、悲しみの他者懸念因子と悲しみの必要性因子に AQ の主効果がみられ、AQ 高群では悲しみの他者懸念が高く、必要性が低いという結果が得られた。

滝吉・田中 (2011b) は、PDD 者と定型発達者を対象に面接による研究を行い、PDD 者の情動への言及には、他者と自分の気持ちや状態が合わないことへの不安や恐怖、ストレスなどの高さが語られていたことを明らかにした。



本研究において ASD 傾向の高い者が悲しみの他者懸念が高く、必要性が低いという結果は、PDD 者の対人間のネガティブな情動の経験の想起が、一般大学生の中にも認められる可能性があることを示唆している。

3. 本研究の結論と今後の課題

本研究の結論は、(1) ASD 傾向の高い者は自尊感情が低いことが示されたが、その自尊感情の低さは、ASD 傾向自体の直接的な影響だけではなく理想自己と現実自己のズレが影響を与えている可能性があること、(2) 女子において、ポジティブな理想自己と現実自己のズレが大きくなっていることを水間 (2004) から解釈すると、女子はポジティブな理想自己を重要なものとしてとらえ、現実の自分の評価が低くなっているといえること、(3) ASD 傾向の高い者は、自己の悲しみに対して他者を意識した否定的な評価を行い、悲しみの必要性を感じにくいという可能性があることである。

本研究の課題は、第一に、サンプルに偏りがあることである。上述したように、情動への評価尺度と自尊感情尺度との相関について先行研究 (奥村, 2008) で確認されたほどの相関係数が得られなかった。その一因としてサンプルの偏りが考えられる。したがって、本研究で得られた知見を全ての大学生にすぐさま適用することは難しい。

第二に、本研究では、理想自己の分析において、個人が重要だと思う特性について検討していないことである。理想自己と現実自己のズレと自尊感情の関係は、個人が重要だと考える領域において顕著に表れるとされている (遠藤, 1992b)。今回使用した山本・田上 (2003) の高校生用自己概念尺度では、理想自己得点の評定の高さで、その内容の重要性を測定することができるが、対象者によっては複数、またはすべての内容について“そうありたい”(ネガティ

ブ領域においては“そうありたくない”)と同程度記述してしまう。そのため、今後は対象者に自身の理想像を記述させるような個性記述的な手法で理想自己と現実自己のズレを測定し、ASD 傾向との差を検討していく。

第三に、AQ と情動への評価尺度との関係について十分に検討できなかったことである。本研究では、AQ と情動への評価との間の関係性を十分に見出すことができなかった。しかし、先に述べたように、特に情動への評価尺度の回答について、本研究の対象者には偏りがある可能性があることから、本研究結果のみを参考に AQ と情動への評価との間の関係が限定的なものにすぎないと結論付けることには慎重であるべきであり、今後再検討する必要がある。

引用文献

- ・ American Psychiatric Association(2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth edition:DSM-5. (高橋三郎・大野 裕 (監訳)(2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- ・ Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E.(2001). The Autism-Spectrum Quotient(AQ) : evidence from Asperger Syndrome/high functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- ・ 遠藤由美 (1992a). 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63(3), 214-217.
- ・ 遠藤由美 (1992b). 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- ・ 福島裕人・高須彩加 (2011). 大学生のアレキ



- シサイミアと愛着スタイル及び自閉傾向との関連 東海学院大学紀要, 5, 121-128.
- ・井上雅彦 (2010). 二次障害を有する自閉症スペクトラム児に対する支援システム 脳と発達, 42, 209-212.
 - ・石井正博・篠田晴男 (2014). 発達障害のある学生への進路支援の現状と課題—自閉症スペクトラム生涯を中心として— 立正大学心理学研究年報, 5, 105-112.
 - ・神尾陽子 (2008). 一般精神臨床で出会う高機能広汎性発達障害成人患者の診断をめぐる臨床的問題 精神誌, 110(10), 968-973.
 - ・國平 搖・千住 淳・若林明雄・長谷川壽一 (2002). 健常大学生における自閉圏尺度の個人差 (1)—気質・認知機能・性差との関連— 日本性格心理学会大会発表論文, 11, 58-59.
 - ・松岡弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— 教育心理学研究, 54, 45-54.
 - ・宮下充司 (2014). アメリカ精神医学会の改訂診断基準 DSM-5 : 神経発達障害と知的障害, 自閉症スペクトラム障害 相山女学園大学教育学部紀要, 7, 65-78.
 - ・水間玲子 (2004). 理想自己への志向性の構造について—理想自己に関する主観的評定との関係から— 心理学研究, 75(1), 16-23.
 - ・守口善也 (2011). アレキシサイミアの脳画像研究 心身医学, 51, 141-150.
 - ・西田麻野 (2015). 主観的感情体験の発話内容分析から捉えた一般大学生の自閉的傾向とアレキシサイミア傾向の関連性の検討 発達心理学研究, 26(4), 300-311.
 - ・奥村弥生 (2008). 情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連 教育心理学研究, 56(3), 403-413.
 - ・奥村弥生 (2010). 「情動への評価」研究の展望—概念、情動過程での位置づけ、その形成について— 九州大学心理学研究, 11, 109-118.
 - ・Prizant, B. M., Wetherby A. M., Rubin, E., Laurent, A. C., & Rydell P. J. (2006). The SCERTS Model : A comprehensive educational approach for children with autism spectrum disorders (Vol. II) : Program Planning and Intervention. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.
 - (長崎 勤・吉田仰希・仲野真史 (訳) (2010). SCERTS モデル自閉症スペクトラム障害の子どもたちのための包括的教育アプローチ 1 巻アセスメント 日本文化科学社)
 - ・桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
 - ・佐藤克敏・徳永 豊 (2006). 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状 特殊教育学研究, 44(3), 157-163.
 - ・千住 淳・國平 搖・若林明雄・長谷川壽一 (2002). 健常大学生における自閉圏尺度の個人差 (2)—うつ、いじめ被害経験との関連— 日本教育心理学会総会発表論文, 44, 34.
 - ・杉山登志郎 (2014). 発達障害から発達凸凹へ 小児耳, 35(3), 179-184.
 - ・滝吉美知香・田中真理 (2009). ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容—自己理解質問および心理劇的ロールプレイングをととして— 特殊教育学研究, 46(5), 279-290.
 - ・滝吉美知香・田中真理 (2011a). 自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(1), 497-521.
 - ・滝吉美知香・田中真理 (2011b). 思春期・青年期の広汎性発達障害者における自己理解



- 発達心理学研究, 22(3), 215-227.
- ・ 漆畑輝映・加藤義男 (2003). 思春期高機能広汎性発達障害者の学校不適応について 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 2, 191-201.
 - ・ 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S(2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75(1), 78-84.
 - ・ Wing L.,(1981). Asperger's syndrome : a clinical account. *Psychological Medicine*, 11, 115-129.
 - ・ 山本淳子・田上不二夫 (2003). 思春期における自己概念と自尊感情との関連 筑波大学心理学研究, 25, 149-161.

The Relationships among Autism-Spectrum Traits, Self-Concept, and Evaluation of Emotion of University Students

Minoru Matsuno Akira Yamazaki

The purpose of this study was to examine relations among autism spectrum traits, self-concept (discrepancy between positive/negative ideal-self and real-self), and evaluation of emotion. Autism-Spectrum Quotient, Self-Concept Scale for High-School Student, Evaluation of Emotion Scale, and Rosenberg Self-Esteem Scale were administered to university students (N = 300: 62 males and 238 females). The results of the survey showed that there was a possibility that autism spectrum traits and the discrepancy between positive ideal-self and real-self had influence on low self-esteem. And the results also indicated that the participants with the high autism spectrum traits identified their own grief negatively and didn't tend to feel necessity of sad. Further investigations are expected to reveal supporting strategies that makes the discrepancy between positive ideal-self and real-self of students with high autism spectrum traits smaller and the discrepancy between negative ideal-self and real-self larger.

Key words: autism spectrum traits, self-concept, evaluation of emotion, self-esteem, university students